

令和 4 年 6 月 8 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K01226

研究課題名(和文) グローバル・サウスからの新たな市民社会論 ヴァナキュラーな社会性の民族誌的探究

研究課題名(英文) Towards vernacular public sphere in the Global South

研究代表者

関 恒樹 (Seki, Koki)

広島大学・人間社会科学研究科(国)・教授

研究者番号：30346530

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、フィリピン・マニラ首都圏をはじめ、グローバル・サウスの都市の脆弱性と不確実性の背景として、ネオリベラリズムに基づく都市開発によって生じる「生産性」の空間と「非生産性」の空間の差異化と分断に注目した。近年のマニラにおいては、一方では「生産性」の空間としての複合ビジネス地区が各所に誕生している。他方で、ジェントリフィケーションによる都市空間の分断によって貧困層の周辺化と脆弱性が顕在化する。そのような不確実性の中において、あらたな市民社会的つながりが萌芽的に見出される状況を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、現代世界における「社会的なもの」の再編とリスク統治の今日的あり様を、フィリピンにおける脆弱性とレジリエンスの民族誌に基づいて明らかにした。社会政策の実施過程を、人々の生の保障のための相互性としての「社会的なもの」と、生産性や効率を追求する「経済的なもの」の相互浸透の局面に注目して包括的に論じた。このような研究は、グローバルサウスの視座からの、新しい市民社会論、ヴァナキュラーな公共性に向けた議論として、人類学的な意義を持つと同時に、ポストネオリベラリズムの社会的紐帯の模索が続く現代社会に向けた、社会的意義を持つといえる。

研究成果の概要(英文)：This study focuses on the differentiation and division between "productive" and "unproductive" spaces caused by urban development based on neoliberalism as a background of urban vulnerability and uncertainty in the Global South, including Metro Manila in the Philippines. In Manila in recent years, on the one hand, business complexes as "productive" spaces have sprung up in various parts of the city. On the other hand, the fragmentation of urban space through gentrification has brought about the marginalization and vulnerability of the poor. In the midst of such uncertainty, we have identified a situation in which alternative civil society connections are emerging.

研究分野：文化人類学

キーワード：都市開発 郊外化 ジェントリフィケーション スラム 再定住 市民社会 グローバルサウス フィリピン

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

グローバル化とともに浸透する新たなリスクと不確実性の中で、市民社会的なつながりや連帯の構築は、今日喫緊の課題となっている。しかし、後に詳述するように、近代西欧に端を発する市民社会は、解放と同時に抑圧と排除をもたらす二面性を有していた。本研究では、グローバル・サウスの地域社会において歴史的に蓄積されてきた、モラル、慣習、人々の多様かつ豊饒なつながりの諸実践、すなわちヴァナキュラーな社会性に注目しつつ、解放と抑圧という二面性を克服する新たな市民社会論の提示を試みるものである。

2. 研究の目的

本研究では市民社会を、近代西欧における資本主義社会の発展に必要な合理性と理性的規範が醸成される領域であり、その様な合理性と規範を内面化した市民を育成する装置として規定する。つまり、それはNGO・NPOなどの自発的結社のみをさすのではなく、それらの組織を含みつつ広がる市民的結合の領域である。ミシェル・フーコーに言及するまでもなく、近代の歴史において人々は、核家族、学校、工場、あるいは官僚制といった制度のもとで資本主義の合理性を内面化し、国民国家の一員としての市民となるべく規律化されてきた。そのような市民による広範な連帯によって形成された市民社会は、人権、自由、民主主義、私的所有権などの近代的価値の普及を可能にする一方で、そのような価値、合理性、モラルを共有し得ない者たちを「非市民」、あるいは「市民以前」として周辺化し、排除する装置でもあった。

特に近年のネオリベリズムの潮流のなかで、普遍的な福祉やセーフティネットの提供者としての国家の役割が後退するとともに、人々の統治の担い手としての市民社会の機能が顕在化しつつある。市民社会による統治は、生産的な企業家としての市民、合理的な消費者としての市民、リスクをヘッジしつつ積極的に利用していくリスクコンシャスな市民など、国家や社会に依存することなく自己統治可能な市民の育成、賞揚を通して達成される。他方で、貧困、失業、老い、病、障害、災害など、同じくネオリベリズムによって増幅する新たなリスクや不確実性は、自己統治可能な市民とはなり得ない人々の周辺化と排除をもたらす。このような包摂と解放の一方で生み出される排除と周辺化という二面性は、近代西欧市民社会の内包する限界として捉えることができる。このような市民社会による統治を批判的に考察しつつ、その限界を克服してゆく新たな市民社会論の試みとして、在地の共同体に見出される豊饒かつ多様なヴァナキュラーな社会性に注目するのが、本研究の意図である。ヴァナキュラーな社会性とは、在地社会の伝統や固有性に埋め込まれた、自己・人格の観念、モラル、規範、生、身体性(身体感覚)を基盤としながら紡がれるつながり、共同性、相互性(あるいは互酬性)を意味している。それら親密圏に根差す社会性が、公共圏としての市民社会との間に矛盾と対立を生じさせつつも、差異を含みながらも相互作用し、暫定的に接合し、部分的に連結することで、いかなる新たな社会的結合が生み出されつつあるのか、この点が本研究の基本的な問いである。本研究が対象とする「ヴァナキュラー市民社会」とは、西欧近代市民社会の領域と、ヴァナキュラーな社会性が相互浸透する異種混交の重複領域を指す。

3. 研究の方法

本研究の方法論は主にマニラ首都圏でのフィールドワークによる資料収集である。申請者は既に、10年以上に渡りマニラ首都圏の貧困層地区でのフィールドワークを行ってきた。本件のテーマに関しても、既に諸関係者へのコンタクトや予備的調査を行っている。さらに、文献調査によって、グローバル・サウスの他事例との比較、総合、理論化を行う。

4. 研究成果

本研究では、その課題である「ヴァナキュラーな市民社会」とそこに見出されるつながりや社会性を、1986年にマルコス大統領による独裁体制が倒れて以降、民主化と自由化への移行期にあるフィリピンにおいて、諸アクター間のつながりやネットワークとしての社会性が、いかなる形で生成しつつあるのかという点に注目しつつ明らかにした。そして、そのような社会性が、今日のフィリピンの都市を生きる人びとが経験するさまざまなリスクや不確実性を軽減すると同時に、都市空間の新たな秩序をもたらす統治性として作用している状況を明らかにした。そのような研究のための具体的事例として、本研究では、首都圏マニラにおけるスラム移転プロジェクト「ピープルズ・プラン (People's Plan)」を対象とした。本研究の成果は、フィリピン同様1990年代以降民主化と自由化への移行を経験するグローバルサウスにおける、社会性と統治性の複雑な絡み合いの理解に資するものであるといえる。

今日のフィリピンの主要都市、なかでもマニラ首都圏の都市空間を特徴づけるのは、グローバルな民間資本の利益を優先したジェントリフィケーションの進展である。高級ショッピングモール、オフィスや居住のための高層 condominium などが集積する商業地区の急速な発展は、経済成長著しいグローバルサウスの国々に多かれ少なかれ共通する現象といえる [Choi 2016; Ortega 2016a, 2016b, 2018; Roderos 2013; Shatkin 2004, 2008]。こうしたフィリピンの都市空間の変容の中で、恒常的に立ち退きの脅威を感じて生活せざるを得ないスラム住民にとり、居住権をいかに確保するかが喫緊の課題となる。

本研究の一つ目の結論として、ポスト権威主義体制期に登場した諸アクター間の接合に注目すると、それがスラム住民の窮状や不確実性を軽減するための装置となっていることを明らかにした。ここでの諸アクターとは、人間や組織のみでなく、法律などで構成される諸制度、それを支えるアイデアをも含む。そのような諸アクターの接合としての社会性の束が、都市貧困層の居住権の一定の保障に果たす役割が明らかになった。

二つ目の結論として、このような社会性は、スラムの雑然としたインフォーマリティを、再定住地の秩序だったフォーマリティへと転換する統治性の装置であることを指摘した。それは、新たな主体とコミュニティの養成を通して作用する権力であるといえた。

三つ目の結論として、そのような統治性による都市空間の再編の過程で、二つの対照的なコミュニティ概念が浮き彫りになることが明らかになった。具体的には、再定住地における経済的持続可能性に最適な空間としての「エンタープライズとしてのコミュニティ」と、相互扶助、承認、人格的成長、コンヴィヴィアリティなど多様な意味と機能を内包する空間としての「共在性としてのコミュニティ」である。本研究の重要な成果の一つは、これら矛盾し、拮抗する二つのコミュニティ概念を内面化しつつ、今日の都市を生きる人々の両義的なエイジェンシーを浮き彫りにしたことである。以下では、これら3点の結論について、さらに詳細に記述・分析していく。

まず一つ目の結論に関してであるが、本研究では、ポスト権威主義体制期に顕在化した制度、アイデア、そして人間の諸アクターの接合が、都市の不確実性に対処するための社会性の束として機能していることを論じた。特に、制度に関しては、「参加型民主主義」を基本理念とする憲法とその具現化としての諸法制によって、フィリピンの政治的機会構造が大きく変化し、住民組織、NGO、協同組合、アソシエーション、民間セクター、そして地方自治体などの非国家的アクターが活動する環境が拡大した過程を浮き彫りにした。これら非国家的アクターの自律性を高めたのは、「レジリエンス」や「エンパワーメント」などのアイデア、そして「リスク」に対する新たな認識であった。さらに、このような政治的機会構造の変化に促されつつ、権威主義体制期に反政府運動に身を投じた左翼活動家たちが合法的議会闘争や市民社会との連携に活動をシフトしていく中で、改革志向の「ニュー・ブリード」地方政治家や、草の根住民組織と接合してゆく状況を、ピープルズ・プランを推進する主要 NGO リーダーのライフヒストリーから検討した。これらの制度、アイデア、人的アクターが接合し、社会性の束となることによって、住民の自助による災害リスクの削減を基本理念とするピープルズ・プランが構想され、実行されたといえよう。こうして、ポスト権威主義体制期の新たな社会性の束は、甚大化する災害と都市のジェントリフィケーションによってもたらされる新たなリスクと不確実性ととも生きるスラム住民に対し、一定の居住権の確保を通じた保障を与えていることが明らかになった。

本研究の二つ目の結論として、ポスト権威主義体制期の社会性の束は、住民にとっての保障の側面と同時に、スラム住民を自己統治可能な市民的主体へと訓練してゆく統治性の側面を明らかにした。それは、再定住地における適切な「地所管理」を行うためのモラル、美的感覚、習慣と性向を内面化した市民的主体を創出する権力の作用であった。この点を考える上で興味深いのが、再定住のための住民協同組合 SRCC のリーダーであるテスの以下のような語りである。これは、ピープルズ・プランに参加せず、いかなる移転の提案をも拒絶し、現住地サンロケに残ることを主張する住民グループを批判して語られたものである。

「彼らは、移転に関する何ら具体的な提案なしに、路上のデモで叫んでいるだけ。路上で叫ぶことで問題を解決しようとするのは、もう古い。適切な手順を踏むことが必要なのだ。対話が必要な時に、単に路上に出て行って、一体誰と話をするというのだ？ 建物に向かって話でもしているのか？」

この語りは、テスが数十年に及ぶ居住権を求める闘争の中で、当局との衝突よりも対話、合意、そして参加を優先する市民としてのモラルティを内面化したことを示唆している。そこには、ロイの論じた「市民的統治性」を読み込むことが可能であろう。自己統治する市民的主体とは、「規律化されるとともに自主性を持ち、エンパワーされつつも従順であり、欲望しつつも利他的であるような主体」といえる [Roy 2009: 168]。彼らが内面化するモラルティは「協力、参加、そして仲介」であり、「抵抗し、対立することは、市民性の範囲からはみ出すことなのである」 [Roy 2009: 173]。

3点目の議論として、そのような統治性から生み出された「エンタープライズとしてのコミュニティ」の観念は、しばしば住民自身の抱く「共在としてのコミュニティ」とは食い違い、結果として住民は移転に際して両義的な感情を抱いていることを明らかにした。ピープルズ・プランに具現化される都市の統治性は、再定住地における「地所管理」と「事業」の持続的経営という唯一の目的に結びつけられた、標準化され、規格化されたコミュニティ概念によって

可能になった。それは、債務不履行のリスクを軽減するために最適化された集団としてのコミュニティであった。しかし、数十年にわたるスラムでの共住と共在によって培われたコミュニティ概念は、そのような単純化されたコミュニティ概念とは対照的なものであった。それは互助、相互承認、そしてコンヴィヴィアリティといった多相性、雑多性を持つコミュニティなのであった。

本研究が明らかにした、スラム集落の雑多なインフォーマリティから、「地所管理」と「事業」のためのクラスター化されたグリッド空間へという、ジェントリフィケーションによってもたらされる都市の変容は、多くの地域、時代における事例にも共通してみられる。これらの事例との差異と共通性に注目しつつ、都市の変容に埋め込まれた微細な統治性に注目することは、今日のグローバルサウスの都市における保護と周縁化、保障と不確実性の絡まり合いを生きる人々の生の在り様を明らかにすることにつながるであろう。

(引用文献)

- Choi, Narae 2016. Metro Manila through the gentrification lens: Disparities in urban planning and displacement risks, *Urban Studies* 53(3): 577-592.
- Ortega, Arnisson Andre, 2016a *Neoliberal Spaces in the Philippines: Suburbanization, Transnational Migration, and Dispossession*, Lexington Books,
- Ortega, 2016b. Manila's metropolitan landscape of gentrification: Global urban development, accumulation by dispossession & neoliberal warfare against informality, *Geoforum* 70:35-50.
- Ortega 2018. Transnational Suburbia: Spatialities of Gated Suburbs and Filipino Diaspora in Manila's Periurban Fringe, *Annals of American Association of Geographers* 108(1):106-124.
- Roderos, Ray Simon, 2013 Gentrification, Displacement, and the Challenge Facing the Urban Capital, *Social Transformations* 1(2): 79-103.
- Roy, Ananya 2009 Civic Governmentality: The Politics of Inclusion in Beirut and Mumbai, *Antipode* 41 (1): 159-179.
- Roy, Ananya 2011 *The Blockade of the World Class City: Dialectical Images of Indian Urbanism*, in Roy, Ananya and Aihwa Ong (eds.) *Worlding Cities: Asian Experiments and the Art of being Global*, pp259-278. Blackwell Publishing.
- Shatkin, Gavin 2004 Planning to Forget: Informal Settlements as "Forgotten Places" in Globalising Metro Manila, *Urban Studies* 41(12): 2469-84.
- Shatkin, Gavin 2008 *The City and the Bottom Line: Urban Megaprojects and the Privatization of Planning in Southeast Asia*, *Environment and Planning A* 40(2): 383-401.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Seki, Koki
2. 発表標題 Emergent Socialities and Governing Precarity in Contemporary Philippines
3. 学会等名 Seminar Series on Southeast Asia, Singapore Management University (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Koki Seki
2. 発表標題 Post-Authoritarian Sociality and Urban Governmentality: Slum Eviction and Socialized Hosing Project in the Philippines
3. 学会等名 118th Annual Meeting of American Anthropological Association (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Seki, Koki (ed.)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 216
3. 書名 Ethnographies of Development and Globalization in the Philippines: Emergent Socialities and the Governing of Precarity.	

1. 著者名 関恒樹（共編著）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 七月社	5. 総ページ数 395
3. 書名 グローバリゼーションとつながりの人類学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------